

大宮氷川神社に関する研究

— 角南隆と国粋建築研究所 —

Keywords

角南隆 昭和15年 谷茂雄
国粋建築研究所 拝殿 祝詞殿

1. 研究背景・目的

大宮氷川神社は埼玉県さいたま市大宮区高鼻町にある神社で、大宮を中心に280社ある氷川神社の総本社である。大宮という地名の由来となった氷川神社は第五代孝昭天皇の時に創立され、古くから歴代の朝廷に尊崇されてきた。現在の氷川神社の建築の多くは昭和15年の皇紀2600年に建て替えられたものであり、その設計者は角南隆とされているが、定かではない。また、青図調査からは、青図に載っていた印鑑から国粋建築研究所が設計に関わっていることがわかった。そこで本研究では角南隆と国粋建築研究所との関係性について調査し、昭和期に建てられた大宮氷川神社の建築が誰によって設計されたのかを明らかにする。

2. 研究方法

- ①先行文献の分析
- ②氷川神社所蔵の青図を基に、大宮氷川神社内の各建築物について特徴を把握する。
- ③大宮氷川神社にて実測調査を行う。
- ④③より図面を作成し、大宮氷川神社の各建築物について考察する。
- ⑤日本建築工芸設計事務所を訪問し、角南隆及び国粋建築研究所について調査し、大宮氷川神社との関係性について考察する。

2.1 実測調査

調査日：2015年10月8日、10月20日
所在地：埼玉県さいたま市大宮区高鼻町1-407
調査対象：勅使斎館、社務所、手水社、神楽殿、他

3. 大宮氷川神社概要

3.1 歴史

大宮氷川神社は今から2000年以上前、第五代孝昭天皇の時に創立され、以後鎌倉、足利、北条、徳川家などにより代々尊仰されてきた。また、源頼朝によって再建され、徳川家により社頭や社殿が建てられてきた。明治元年、明治天皇により氷川神社は勅祭社に定められ、また、武蔵国の鎮守とされた。明治時代以降は歴代天皇に参拝されている。

3.2 御祭神

氷川神社の御祭神は須佐之男命（すさのおのみこと）、

稲田姫命（いなだひめのみこと）、大己貴命（おおなむちのみこと）の三柱である。

3.3 大宮氷川神社の建築

氷川神社境内に残る歴史的建築・青図は以下の通りである。

(1) 本殿 (昭和15年)



図1 本殿

(2) 祝詞殿 (左)、拝殿 (右) (昭和15年)

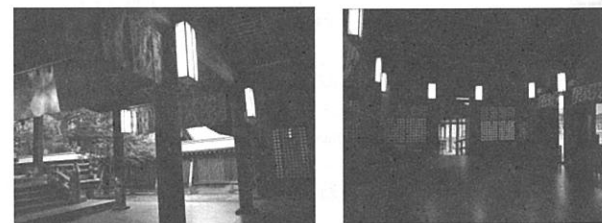


図2 祝詞殿 (左)、図3 拝殿 (右)



図4 拝殿 (左)、図5 楼門・回廊 (右)

拝殿の柱は吹き放しの柱建になっており、参拝者は拝殿から本殿の様子を覗うことが出来る。また、楼門の左右からは回廊が伸びており、楼門・回廊・拝殿に囲まれる形で中庭が形成されている。中庭の中心に舞殿が配置されている。



AK12050

篠原 直通

(3) 社務所 (昭和15年)

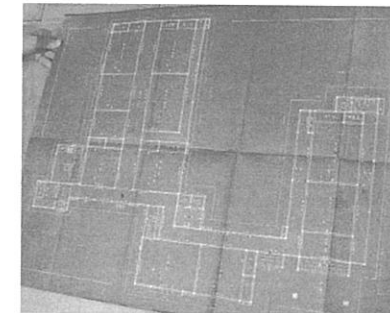


図6 大宮氷川神社社務所青図

(4) 勅使斎館 (昭和15年)

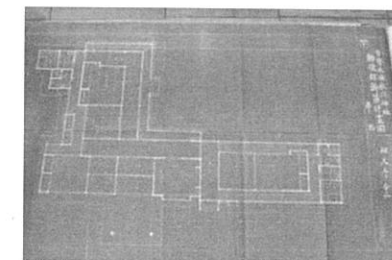


図7 勅使斎館青図

大宮氷川神社は明治元年に勅祭の社に指定され、以後毎年8月1日の例祭に勅使が派遣されている。勅使斎館は勅使をお迎えするための建築である。例祭では勅使が御幣物を持った随員とともに勅使斎館から本殿へ参進する。

(5) 神楽殿 (現神楽殿は平成の再建)

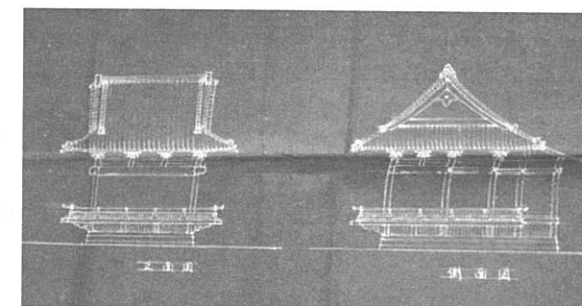


図8 神楽殿青図

大宮氷川神社では毎年3月15日に郷神楽祭が開催され、ここ神楽殿で神楽が演奏される。

(6) 氷川神社本殿 (昭和15年)

(7) 門客人神社 (さいたま市指定文化財、1667年)

(8) 天津神社 (さいたま市指定文化財、1667年)

(9) 御嶽神社 (さいたま市指定文化財、1667年)

磯俣祐介氏の論文によると、門客人神社、天津神社、御嶽神社ともに寛文7年(1667年)に建てられ、三社殿と呼ばれている。三社殿は度々改修・修復が行われてきたが、取り壊されることなく受け継がれてきており、特に天津神社、御嶽神社は徳川家が造営した建築であることから、非常に重要な文化財となっている。

(10) 宗像神社 (明治23年)

(11) 楼門 (昭和15年)

(12) 舞殿 (昭和15年)

(13) 東門

(14) 額殿 (明治41年)

(15) 神橋 (昭和18年)

(16) 神子神楽殿 (明治41年)

(17) 手水舎

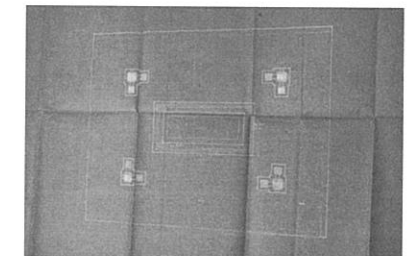


図9 手水舎青図

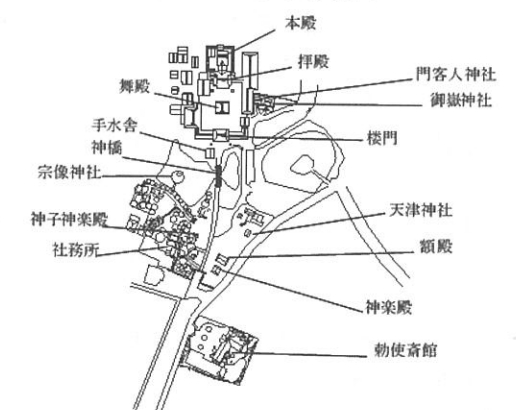


図10 大宮氷川神社 配置図

4. 角南隆について

角南隆は大正～昭和時代にかけて活躍した建築家であり、内務所神社局の技術官僚として活動していた。神社局の技師になる前は伊東忠太の下で明治神宮造営に関与していた。角南時代の神社局の代表作に吉野神宮、近江神宮がある。また、戦後の明治神宮の復興も指揮した。

表1 角南隆の経歴

年月	事項
1887年	岡山県に生まれる
1915年	東京帝国大学工科大学建築学科卒業
1917年	明治神宮造営局技師
1920年	内務省神社局勤務
1939年	内務省神社局造営課長
1947年	日本建築工芸株式会社設立
1955年	明治神宮臨時造営部部長
1980年	死去

4.1 神社制限図について

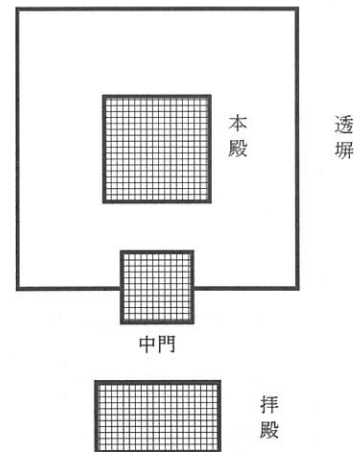


図11 神社制限図概念

明治政府は明治維新に功績のあった藩主などを神社として祭ることとし、その結果多数の神社が各地で創建されることになった。これを機に神社建築の規格化を目的に造られたのが神社制限図である。神社制限図では神社を大・中・小社にわけて諸建築の形式・大きさ・配置等を制限した。これらの神社では社殿は互いに独立し、本殿と拝殿は中門によって分離されている。1915年に創建された明治神宮も、神社制限図の面影を残していた建築の一つである。

4.2 角南隆の設計手法（明治神宮社殿の復興）

角南隆は1955~1958年にかけて行われた明治神宮社殿の復興を指揮した。雑誌「新建築」の中で、角南は神社制限図による建物の不便性について指摘し、今回の復興計画で空間構成を大きく改変した。復興にあたり、
(イ) 本殿の位置・大きさなど改めないこと
(ロ) 拝殿の位置と基礎はそのまま使うこと
(ハ) その他の在来の基礎はできる限り使うことを条件に進めた。

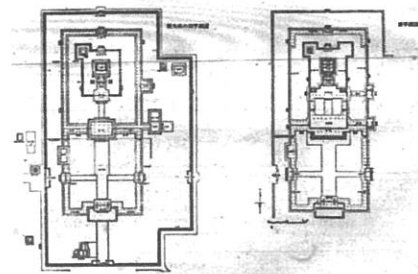


図12 明治神宮復興前（左）と復興後（右）

拝殿を神職や特別な参列員などの本席としての建物（内拝殿）と、一般参列者の席であり日常は大衆が参拝する建物（外拝殿）にわけた。内拝殿と外拝殿の間に間隔を設け、二つの建物の連絡は左右の渡廊でつなぎ、間隔の部分は中庭とした。

内拝殿は在来の中門があった場所に設けた。舞臺もできよう十分な広さと天井高をとり、前面は外拝殿から本殿扉前のすべてが見渡せるよう吹放しの柱建とした。

内拝殿の奥は祝詞殿によって本殿に連なっている。風雨による不都合を考え、左右はガラス入りの建具を建て込んだ。また、祝詞を座って演奏できるよう一部を床張りに改めた。

外拝殿は身舎の部分を旧拝殿の基礎の上に建てられた。雨天時の参拝において軒先だけでは風雨を凌げないと考え、外拝殿の一間を向拝として参拝者に与えた。

これらのかたちは戦中期の神社造営でも繰り返し採用された。

5. 日本建築工芸設計事務所訪問

日本建築工芸設計事務所は角南隆によって設立された建築設計事務所である。本研究では実際に日本建築工芸設計に訪問し、資料の調査及び聞き取り調査を行った。

(1) 造営課職員とその役割分担

「昭和15年の造営課職員とその役割分担」と題された資料をいただいた。以下の表2はその中から大宮氷川神社改築に携わったと思われる人物をまとめたものである。

表2 昭和15年の造営課職員とその役割分担

氏名	官職	事項
角南隆	内務技師	課長
谷茂雄	内務技師	直轄工事関係（氷川、他）
萩須佐兵衛	技手	直轄工事関係（氷川、他）
薄葉二三雄	技手	直轄工事関係（氷川神社出張）

(2) 角南隆の印鑑について

大宮氷川神社の図面も見せてもらい、「角南隆」の印鑑が押されていることを確認した。この図面は1964年の屋根修復工事のときのものである。また、角南隆の印鑑は便宜上押されたのであり、角南自身が設計図を書いたことを示すものではないとのことである。

(3) 戦前期の神社建築の資料が少ない理由

聞き取り調査から太平洋戦争の敗戦後の政策が神社建築に大きな影響を及ぼしたことがわかった。戦後、神社建築の図面を所持することが犯罪とされ、その多くは燃やされてしまった。一方で神社本庁などに図面・資料を寄贈する者もあり、これらの資料が現在も残されている。

(4) 大宮氷川神社の回廊について

大宮氷川神社の回廊は拝殿へは繋がっておらず中途半端な印象を受けるとの指摘も受けた。なお、同時期に進められた樫原神宮の修築では回廊は繋がっている。

6. 国粋建築研究所について

大宮氷川神社所蔵の青図の中で、社務所、勅使斎館、手水舎の図面には「国粋建築研究所」と書かれた印鑑が押されていた。

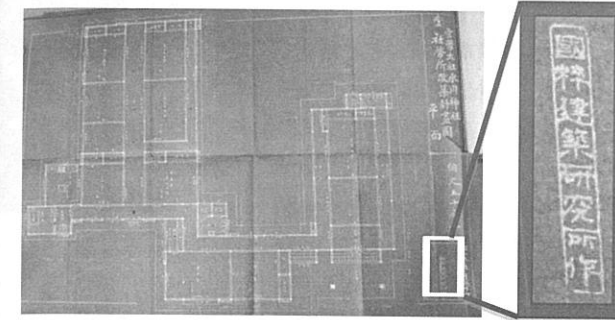


図13 国粋建築研究所印鑑

大正末から昭和初期では数多くの民間設計事務所が育ったが、そのうちの神社の場合の代表の一つとして挙げられるのが国粋建築研究所である。1930年以降はこれらの民間設計事務所が神社造営に関与することも多く、国幣社などの設計に腕を振るった。また、日本建築工芸設計事務所の資料で、二本松孝蔵について「国粋建築研究所主」と書かれており、彼が所長であることがわかった。また、参考文献8によると、二本松孝蔵は工手学校（現・工学院大学）出身の設計者であり、明治神宮造営局の職歴がある。国粋建築研究所では二本松孝蔵の他に5人の職員が所属していたことがわかっている。

7. 角南隆と大宮氷川神社との関係性

(1) 神社新報 記事より

神社新報の1992年9月21日の紙面では、内務省の神社建築に関する記事が記載されている。その中で元内務省技師の谷茂雄が、「私は角南課長の考えのもと計画図を書いて、それを局議にかける。」と言及しており、その例として大宮氷川神社を挙げている。

また、1948年7月12日の紙面では神社建築を題材とした写真コンテストに関する記事が記載されている。このコンテストで一等に選ばれたのは大宮氷川神社を題材とした写真である。この一等の写真に関して、審査委員の1人である角南隆は「建築は私が作ったものだからよく知っている。」と言及している。

(2) 角南建築と大宮氷川神社の建築との比較

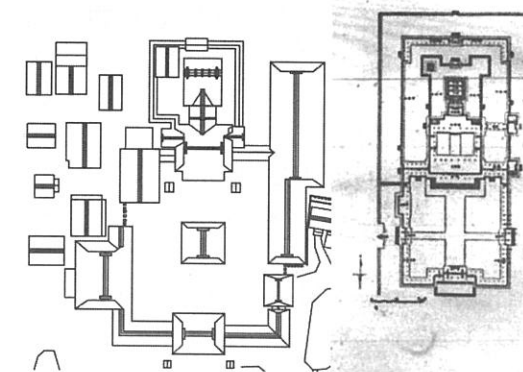


図14 大宮氷川神社 配置図（左）

図15 明治神宮復興後平面図（右）

角南建築と大宮氷川神社の建築の共通点として、拝殿が祝詞殿を通じて本殿に繋がっていることが挙げられる。この他に、吹放の柱建てにより参拝客が拝殿の外から本殿の様子を窺える点、拝殿に翼廊が付加されている点でも共通している。

一方で、明治神宮の渡廊が内拝殿と外拝殿を結んでいるのに対し、大宮氷川神社では内拝殿は設けず、祝詞舎が本殿と拝殿の間に入っている。参考文献10によると、拝殿を内拝殿と外拝殿に分ける手法は戦前の神社建築には少なかった。

8. 総括

神社新報等の資料から、大宮氷川神社は内務省神社局が設計したことは明らかである。一方、角南隆は自ら設計図を書いたり、現場で指揮していた可能性は低く、実際に設計に携わったのは谷重雄他2名の造営課職員や国粋建築研究所の職員であったと思われる。ただ、本殿と拝殿の位置関係は角南建築に共通する部分が多く、大宮氷川神社には角南隆の神社建築に対する考え方が取り入れられていると言える。

これらのことから、大宮氷川神社では、本殿に通じる拝殿・祝詞舎については、内務省神社局造営課の課長である角南隆の考えをもとに造営課職員によって設計されたと考えられる。一方、社務所、勅使斎館、手水舎については青図の建物が現存していることから、印鑑の通り国粋建築研究所が設計したと考えられる。

参考文献

- 1) 大宮氷川神社 公式ホームページ <http://musashiichinomiyahikawa.or.jp/>
- 2) 大宮市史 第三巻中 近世編 大宮市役所出版(1978年)
- 3) 大宮氷川神社 青図
- 4) 2010年度卒業研究 磯俣祐介「武蔵国一宮氷川神社の研究 ―近代における主要建物の復元を中心として―」
- 5) 2010年度卒業研究 佐藤徳奈美「武蔵国一宮氷川神社の研究 ―旧本殿三社と境内変遷―」
- 6) 神社新報 平成4(1992)年9月21日付 05面
- 7) 神社新報 昭和23(1948)年7月12日付 02~03面
- 8) 建築文化2000年1月号 「角南隆 技術官僚の神域：機能主義・地域主義とく国魂神」 青井哲人
- 9) 新建築 第三十四巻第三号 「明治神宮社殿の復興計画について」 角南隆 1959年3月
- 10) 写真資料目録：内務省神社局時代に撮影された神社の景観。vol.1/「内務省神社局・神社院時代の神社建築」 藤岡洋保 神社本庁教学研究所出版, 1995年9月
- 11) 「昭和15年の造営課職員とその役割分担」 日本建築工芸設計事務所寄贈